

令和4年度文化芸術による子供育成推進事業－巡回公演事業－

ワークショップ実施計画書【コロナ対策版】

制作団体名	一般社団法人ジャパン・シンフォニック・ウインズ
公演団体名	シエナ・ウインド・オーケストラ

内容
<p>木管楽器奏者1名、金管楽器奏者1名、打楽器奏者1名、ピアニスト1名、スタッフ2名にて行います。</p> <p>木管楽器と金管楽器、それぞれの音の出る仕組みを解説し、ピアノ伴奏によるソロ曲の実演で楽器の音色を実際に体感します。休憩をはさみ、打楽器奏者により、様々な種類の打楽器や奏法などをレクチャーします。その後、本公演の楽しみ方のレクチャーや体験コーナーで共演するポディパーカッションについてのレクチャー、共演する曲「マンボのビート」の指導を行います。</p>

タイムスケジュール（標準）
9：30 スタッフ・楽員 学校入り
10：00-10：45 ゲネプロ
11：15-12：15 本番（低学年）
13：00-14：00 本番（高学年）
14：30頃 退出

派遣者数 ※派遣者数の内訳を御入力ください
楽員 4名（木管楽器奏者、金管楽器奏者、打楽器奏者、ピアニスト 各1名）
事務局スタッフ 2名

学校における事前指導
共演する楽曲のお手本動画を限定配信し、ワークショップに参加する児童・生徒に事前に見てもらい、当日の指導がよりスムーズになるようにします。

令和4年度文化芸術による子供育成推進事業－巡回公演事業－

本公演実施計画書【コロナ対策版】

制作団体名	一般社団法人ジャパン・シンフォニック・ウインズ
公演団体名	シエナ・ウインド・オーケストラ

演目
バーンスタイン：キャンディード序曲
サン=サーンス：組曲「動物の謝肉祭」より“序奏と獅子王の行進”～“めんどりとおんどり”～“ぞう”～“カンガルー”～“水族館”～“化石”～“終曲”
サン=サーンス：交響詩「死の舞踏」
スパーク：オリエント急行
ハチャトリアン：バレエ音楽「ガイーヌ」より“剣の舞”
シュライナー：インマー・クライナー（だんだん小さく）
（共演）プラード：マンボのビート
サン=サーンス：歌劇「サムソンとデリラ」より“バッカナール”
【アンコール】 河辺公一：高度な技術への指標

派遣者数 ※派遣者数の内訳を御入力ください
指揮 1名、司会 1名、オーケストラ 44名 舞台スタッフ 8名、事務局スタッフ 2名 計 56名

タイムスケジュール（標準）
前日仕込み 8：45 スタッフ入り 9：15-10：15 ゲネプロ 10：45-12：15 本番（低学年） 13：30-15：00 本番（高学年）終演後バラシ・搬出作業 16：00頃 退出

実施校への協力依頼人員

特になし

演目解説

オープニングにはL. バーンスタインのキャンディード序曲を選びました。自由な想像を促すべく、事前の解説なく演奏するため、インパクトのある序曲でスタートします。当団では頻繁に演奏しており、CDにも収録されている得意中の得意ともいえる序曲で、まずは子どもたちの目と耳を釘付けにします。

2曲目は語り付によるC. サン=サーンス作曲、組曲「動物の謝肉祭」です。この語りは東京藝術大学特任教授で構成作家の新井鷗子氏による「ふしぎな動物園」をもとに以下7曲を抜粋しました。

“序奏と獅子王の行進”～“めんどりとおんどり”～“ぞう”～“カンガルー”～“水族館”～“化石”～“終曲”

語りの内容は参考音源にもアップしていますが、主人公の「ぼく」が留守番をしている間にまどろみ、夢の中で体験した「不思議な動物園」でのお話になっており、子どもから大人まで楽しめるように工夫されています。

3曲目は一変してスリラーチックな音楽を配しました。前曲同様C. サン=サーンスが作曲した交響詩「死の舞踏」です。前段「動物の謝肉祭」「化石」のモチーフになった楽曲です。真夜中の墓場に現れた死神がヴァイオリンを奏でると多数の骸骨が音楽に合わせて奇妙なダンスを踊り出し、明け方ニワトリの鳴き声を合図に墓場に戻っていくという奇抜なストーリーは、怖いながらも子どもたちの想像力をかき立てると思い選曲しました。吹奏楽ではヴァイオリンはありませんが、アレンジによりサクソフォンがその重要な役割を担います。

前半最後はイギリスの作曲家P. スパークが作曲したオリエント急行です。この曲は元々 brassバンドのために作られましたが、その後吹奏楽の編成にアレンジされたことにより日本で人気曲になりました。作曲者のスパークを当団はこれまでに2度招聘し、本人のタクトにより公演を行っています。

曲はヨーロッパの主要都市を颯爽と駆け抜けるオリエント急行を描写した楽曲で、列車の出発から到着までを表現しており、車掌が吹くホイッスルや窓外に流れる景色、力強く急勾配を登る様子などが見事に表現されており、イメージが膨らむ楽曲です。

休憩を挟み後半はA. ハチャトリアン作曲のバレエ音楽「ガイーヌ」より“剣の舞”からスタートします。クルド人が剣を振り回しながら戦いの踊りを踊る様子を表現しているといわれるこの楽曲は、令和3年度の当事業の別企画でも取り上げていますが、すでに演奏した5校のいずれでも大変反応がよく、中でも低学年から「もっきんのひとのえんそうがすごい！」とか「はくりょくがあつてすごい！」などたくさんの感想が寄せられていることを受け、選曲しました。

次に選んだ曲はA. シュライナー作曲インマー・クライナー（だんだん小さく）です。この曲はクラリネットのソロによる楽曲です。大変珍しい趣向の作品で、曲が進むにつ

れ管を抜いてだんだん楽器が短くなりながら演奏していく視覚的にも楽しい曲です。まさにオーケストラのエンタメ作品として子どもたちに純粋に楽しんでもらおうと思い選曲しました。

ここで共演コーナを配しました。ビート感が強いラテン音楽 P プラード作曲マンボのビートで「スリーツ」のリズムを手拍子で共演します。さらに曲の途中で打楽器奏者によるリードで「コール&レスポンス」によりボディパーカッションで共演します。

最後の曲として選んだのはサン=サーンスの歌劇「サムソンとデリラ」より“バッカナール”です。

パレスチナが舞台のこのオペラはペリシテ人とヘブライ人の争いを描いた愛憎渦巻く内容で、全体のストーリーについては子どもたちにとっては到底理解不能ですが、第3幕の第2場で演奏されるバッカナールは、エキゾチックな旋律が印象的で子どもたちの想像力を刺激することまちがいなしの楽曲と思い選びました。あえて子どもたちの目線で大人たちが繰り広げる宴の様子を自由に発想しながらオリエンタリズムにあふれるこの曲を楽しんでもらえればと思います。オペラではこの曲のあとに、宴が行われた神殿が崩壊し、ドタバタで幕を閉じますが、そこは伏せて演奏のみ楽しんでいただこうと思います。

アンコールとして用意したのは河辺公一作曲の高度な技術への指標です。仰々しい題名のこの曲は全日本吹奏楽コンクールの課題曲として作曲されました。その名の通り高度な演奏技術が求められる作品ですが、曲想は華やかで随所にスタンドアッププレイを織り交ぜ、中間部はジャズテイストに仕上げられた、見ても聴いてもとても楽しい曲です。当団ではオープニングとして頻繁に演奏していますが、あえて最後のアンコールとして取り上げてみました。いろいろな表現の楽曲を取り上げてきましたが、最後にはプロとしてのテクニックを存分に披露する華やかな楽曲を子どもたちに届けたいと思い、選曲しました。

児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

コロナ禍においての参加は非常に難しい中、物理的な接触や飛沫が飛ぶリスクがないボディパーカッションによる共演を選択しました。ノリのよいラテン音楽から「マンボのビート」を取り上げ、ラテン音楽の基本的なリズム「スリーツ」を手拍子で共演し、さらにリズムでの対話が楽しい「コール&レスポンス」を体験してもらいます。

児童生徒とのふれあい

コロナ禍においては実際に距離を縮め、ふれあうことが困難です。ソーシャルディスタンスを保ちながら、リズムを掛け合うことで心のふれあいを感じ取れるように工夫します。